

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	古代英語におけるkenning : その機能について <特集 比喻表現>
Author(s)	宮本, 美枝子
Citation	広大言語 , 8 : 19 - 24
Issue Date	1968-12-10
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046288">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046288</a>
Right	
Relation	



- ハムレット : 三神勲訳 : 筑摩書房
- 英米故事伝説辞典 : 井上義昌 : 富山房
- 英語学辞典 : 市川三喜編 : 研究社

< The end >

—— S. 43. 8. 28. (水) ——

## 古代英語における kenning

### その機能について

宮 本 美 枝 子

古代英詩を特徴づけるものは、形式的な面、内面的な面に於いて数多くあるが、なかでも独特の韻律を構成した頭韻法 (alliteration) と代称 (kenning) が最も目立った存在である。小論はこのうちの kenning の機能——特にその比喩的機能に重点を置いて——についての今までの研究を私なりにまとめたものである。

Christine Brooke-Rose はその著 A Grammar of Metaphor に於いて時代の差別によって隠喩を分類しているが、その中で古代英語のメタファーは名詞を中心にし、中世では動詞的であると述べている。そしてこの名詞的隠喩に kenning を分類しているのである。

‘This means that most metaphors, at least those most easily noticed, are usually nouns, not only as epithets but as kennings (the metaphorical compound-noun).’ [註1]

しかし注目すべきことは、metaphorical compound-noun<sup>1</sup> という言い方で理解できるように、彼女は形式的な面から眺めているのであって、果して kenning が隠喩として機能するのかどうかは疑われていない。如何に機能するかという事に関しては、問題は残るのである。

この問題の解決を与えてくれる鍵になるものとして、kenning の起源の問題がある。kenning がいかなる要請に基づいて生れたかを説明する事は、その機能の一端を明らかにすることになるからである。

kenning の起源については、タブー説が一般に認められているようである。Herbert

Read は、そのタブー説を次のように説明している。：

“Kennings may have their origin in some form of taboo. Primitive man associated the thing and its name in an intimate fashion, and when the thing was an object of veneration or fear, he would seek for some form of periphrasis so as to avoid a direct reference. A kenning is a simple periphrasis of this kind.” [註2]

このタブー説が正しいかどうか、それを断定する事は不可能であるが、しかし、このタブー説は、次に述べる理由により、ある程度裏づけされるのではないかと思う。というのは先の引用文で、H. Read が「物が崇敬もしくは恐怖の対象物である時は、直接その物に言及する事をさけて、ある種の迂言法を探した。」と述べていたように、実際、古代英語に於ける kenning の例を観察すると、宗教や海に関するものが多いのである。これは信仰と畏敬、驚異の念から婉曲な代称で表現したとも考えられるのである。

「神」を表わす kenning をいくつか挙げてみると、

ælda Scyppend (=Creator of men)

wuldres Ealdor (=Prince of glory)

Alwalda (=All-ruler)

Wuldorfæder (=Glorious Father)

monna scyppend (=Creator of mankind)

「天国」の kenning としては、

ecne eard (=eternal home)

æplan ham (=noble home)

bliþan ham (=happy home)

gladrán ham (=glad home)

leohtan ham (=bright home)

また「海」の kenning も多い、

ŷþa gewealc (=rolling of wave)

sealtŷþa gelæc (=tumult of salt waves)

mæwes ǣpel (=home of the sea-gull)

merelād (=ocean-track)

ȳpa geong (=flow of waves)

以上の事から判断する限りでは、「神」とか「天国」、「海」に関する kenning が多いことは、それへの直接の言及を避けようとするタブー説の裏打ちとして十分なものがある。しかしこれで問題のすべてが解決されたわけでない。というのは Old English の詩の詳細な分析は明らかに直接の言及を忌避する必要がないと思われるものまで kenning 的な語がみられるということを見せてくれるからである。そうしてみると、kenning の果す役割は他にもあったという事になる。その点で暗示的なものは、C.L.Wrenn の次の言葉であろう。

“These poetic compounds — whether descriptive epithets or kennings proper — must be translated each in accordance with the poetic needs of the context.” [註3]

ただ ‘poetic needs’ と言っても、これ自体あいまいな言葉で理解に苦しむが、我々はそれを外面——詩の形式——と内面——詩の美学的な面に分けて、考察してみよう。

そこで詩の外形的な面から論を進めよう。kenning の果す機能——つまりいかなる必要性をみたすか——について考える時、何よりもクローズアップしなければならないものに頭韻 (alliteration) の問題がある。古代英詩が alliterative verse であった為に、多くの同意義語が必要になり、kenning がその解決策の一つとなったことは、すでに周知である。

この「同意義語」としての機能の他に、kenning が作詩そのものを代用した、ということが考えられる。これは、D.C.Collins が主張している所のもので、興味深い。氏は、kenning が用いられると、それが Wyld の言う ‘mere frozen lifeless things’ [註4] でもその文は詩(らしく)になると言うのである。特に ‘The Harrowing of Hell’ のような劣った詩では、kenning がそういう意味で意識的に利用されているとし、次の引用で例証している：

ƿæt ƿu us gemiltsie monna scyppend

ƿu fore monna lufan ƿinre modor bosm

sylda gesohtes sigedryten god

nales fore þinre þearfe þeoda waldend  
ac for þam miltsum þe þu moncynne  
oft ætywdeþe þonne him wæs are þearf

(.....that Thou have mercy upon us, Creator of mankind,  
In thy love for men, Thou thyself didst seek Thy mother's  
bosom, Lord god of victories, not because of Thy need,  
Ruler of peoples, but because of the mercies that Thou  
hast often shown to mankin when they had need of grace...)

(Italics not in the original)

(The Harrowing of Hell 110—115)

この例文より氏いわく、

“Here the poet has used some of the most frequently  
recurring kennings ....., none of them distinguished, and  
doing little more than hold the lines together.” [註5]

すなわち、kenning は、“to hold the lines together”としての役割をも果たしているのである。

以上、外面的な必要性について論じてきたが次に内面的な機能について論を進めてみよう。ここで問題にされるのはその美学的機能である。もちろん kenning は歴史的に於いて最も古い時代に於ける迂言法の一つであり、原始時代にその起源を発する現象であって、本来、タブー説ですでに考察したように、特に美的・修飾的意識は含まれていないというのは事実のようである。しかるに、H.C.Wyld が ‘Diction and Imagery in Anglo — Saxon Poetry’ の中で主張しているように、kenning は想像的・感覚的であるということに於いて詩的機能を果たしていることも否定出来ない。C.L.Wrenn のように、この点をもっと ‘poetical’ なものだけに限って kenning を定義づけようとする学者すらいる位である。

“A kenning may loosely be defined as the poetic interpretation or description of a thing or thought by means

of a condensed simile ; and in Old English such a condensed simile normally takes the form of a compound. The kenning is distinguished from the merely descriptive epithet ..... by the presence of an inherent or implied condensed simile.” [註6]

氏のように kenning が simile を含むものとする考えの根底には、kenning を完全に poetic な立場から解釈しているという態度が見られる。

ただし美的な要請があるにしても、単に修飾的と言える意図的な kenning は余り見当たらない。H. Read は古代英詩における kenning が、後期の隠喩が ‘deceptive intention’ を持っていた点がそれら (= kennings) とは異なるものである。[註7] と評しているが、これは Wyld の ‘(they are) impressive by reason of their truth and beauty. .... (they) show that they had really felt and seen, by actual observation, many aspects of the objects.’ [註8] という指摘を思い出させる。そこには小川二郎先生の「原初感覚」ともいべき「生の」感覚によって捉えられた事物の把握があるのであろう。

では、kenning はいかに比喩的に働くのであろうか。言うまでもなく比喩は、古典的定義に従うと、比較するもの (vehicle) と比較されるもの (tenor) から成立し、前者の属性の中に後者の属性を見抜き、それを総合的に叙述することである。この点からすると、kenning の中には明らかに上に述べたような過程がみられる。‘sun’ を ‘world - candle’ とパラフレイズする心的過程の中には、明りを与えてくれるものとしての、太陽とろうそくの共通の性質が抽出されており、それを契機としてこの kenning が成立するのであって、隠喩としての機能となんら異なるわけではない。

その際、vehicle から tenor への働きかけには種々のケースが考えられる。Henry W. Wells は隠喩を作用の仕方によって七種に分類しているが、それらは美的価値より言うと、三つのグループに段階づけされる。美的価値の低いものから順に述べると次のようになる。

- (1) 装飾的 (decorative) 形象  
誇大的 (violent) 形象
- (2) 集中的 (intensive) 形象  
華麗的 (exuberant) 形象

(3) 沈潜的 (sunken) 形象

根原的 (radical) 形象

拡充的 (expansive) 形象 [註9]

kenning は最も早い時期の隠喩であり、その後の隠喩と異なって、特に修飾的意図はない、ということとは、先に述べた。このことは、集められた kenning (極くわずかではあるが) [註10] の例で(3)のような美的価値の高いものに属するものは見当たらないことによっても理解される。どの kenning がどの形象に属するかについては、又の機会にゆずることにして、ここではデータからいくつかの例をあげておく。

eardstapa (=land-stepper, wanderer)

corna caldest (=the coldest of grains, hail)

sinc bryttan (=distributor of treasure, lord)

sealtȳpa gelāc (=the tumult of salt waves, sea)

ȳpa gelāc (=rolling of waves, sea)

hordcofa (=chamber of treasure, heart)

brēostcofa (=chamber of breast, mind)

wuldres Ealdor (=Prince of glory, God)

scūrbeorge (=protection from storms, roof)

burgtūn (=fence of fortification, protecting hedge)

[註1] A Grammar of Metaphor (1958) PP.1-2

[註2] English Prose Style ( ) P.31

その他に鍋島能弘の「文体美学」P.330をも参照

[註3] Introduction to Beowulf P.82

[註4] H.C.Wyld; 'Diction and Imagery in Anglo - Saxon Poetry' P.83

[註5] 'Kennings in Anglo - Saxon Poetry' P.16

[註6] Note to his 'Beowulf', P.81

[註7] *ibid.*

[註8] *op.cit.* P.58

[註9] 鍋島能弘「文体美学」(1962) PP.199-206